

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介（16） 平成13年1月31日

駿河国地誌シリーズ（その4）

駿河志料（S220/7）

『駿河志料』は文久元（1861）年、新宮高平^{しんぐうこうへい}によって著された地誌です。完成までに6ヶ年もかけた全108巻の大作です。

著者の高平は寛政6（1794）年生まれで、駿府浅間神社（静岡浅間神社）の神職をしていました。神職のかたわら駿河国の各地をめぐり、地誌編さんのために資料を集めていました。安政3（1856）年神職を息子の高景にゆずると、若いころからの志であった駿河国の地誌編さんを開始します。高平は62歳になっていましたが、神職をやめていたので全精力を『駿河志料』編さんに注ぎ込むことができました。『駿河志料』が完成したのは文久元年ですから、高平が67歳の時です。正に生涯学習を地でいくような人物です。

新宮家は幕末の動乱期に没落して稿本^{こうほん}さえも散逸^{さんいつ}してしまいました。静岡郷土研究会の橋本博は散逸していた写本を方々より集め、それらを元に昭和5（1930）年に苦心して全108巻の版本^{はんぽん}を世に出しました。当館では『駿河志料』の写本72冊を所蔵しています。欠本や同一写本があり、全108巻はそろってはいません。

以下巻の構成を簡単に紹介します。首巻に序文や目録を載せてあり、巻の1～巻の3までは「総載^{そうざい}」という題名で、駿河の国の境界や沿革、制度などが簡潔に述べられています。巻の4～巻の69までは郡ごとに記述され、その内訳は志太郡^{しただ郡}、益頭郡^{ましづ郡}、有度郡^{うど郡}、安部郡^{あべ郡}、（府内部）、庵原郡^{いはら郡}、富士郡^{ふじ郡}、駿東郡^{すんとう郡}となっています。それぞれ郡内の村名を挙げ、村里（中心地までの距離）や村高^{むらたか}（村の生産高）、社寺、名勝^{めいしやう}、河川などが記述されています。府内は郡名ではなく、駿府城の城下町のことですが、府内の町数や戸数などを挙げ、国司館跡、今川館跡のことを述べ、さらに町名ごとに社寺などについて記述されています。巻の70～巻の96までは社寺や旧家の古文書が載っています。これは古文書をまねて写したものです。巻の97～巻の108までは公家や武将^{かあう}の花押、名勝地の風景画、河川の図、古器、和歌などについて述べられています。

『駿河志料』は古来の文献と共に、先行して著された『駿河記』や『駿河国新風土記』も引用しています。当館の写本をひもとくと「新庄道雄^{しんじやうみちお}の説に・・・」、「藤泰^{とうたい}の説に・・・」になどの文が出てきます。『駿河志料』は『駿国雑誌』などと同様、県内の歴史や民俗のことを調べるのに欠かせない郷土資料として、現在も活用されています。

当時の新宮家の屋敷は駿府浅間神社の北側にあり、現在は駐車場になっています。菩提寺^{ぼだいじ}は静岡市大岩の天徳院で、高平が使用した机掛けや著作作用紙などが保存されています。高平の墓も天徳院の西南にあります。

【参考資料】

『駿河志料一～四』（S220/8/2）歴史図書社

『静岡市史』（S222/4）静岡市